

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」

[掲載日] 2017年1月19日

[テーマ] 前橋も東京への通勤圏—新幹線も利用 車内快適—

私事で恐縮であるが、妻が長男と次男で合わせて2年9カ月の出産休暇+育児休暇を終え、東京の職場に復帰した。共働きである私たちが一昨年5月に一緒に群馬にやってこられたのは、たまたま彼女が長男の育児休暇中であったから。その後、次男が生まれたため、育児休暇を続いて利用することもできた。

こうした事情を知っている周囲は、彼女の職場復帰のタイミングで子どもたちも東京の自宅に戻り、私一人が前橋に残されると想像していただろう。我々自身もそうした選択を考えなかったわけではない。

自宅近くの保育園はなかなか行列の順番が回ってきそうにないが、数年前に設けられた事業所内託児所に子どもたちを預けることは可能である。いざという時には我々の両親たちの助けを仰ぐこともできる。

でも、1年8カ月間住んで慣れ親しんだ土地を離れるのはつらいことであるし、ありがたいことに、次男が生まれた時にお世話になった前橋の保育園の園長先生が2人の息子を引き受けてくれると言ってくれた。そこで、妻は自宅に戻らず、引き続き前橋の住居に家族とともに住んで、そこから東京の職場に通うことにしたのである。

この話を耳にした周囲は驚いている。毎日通うなんて無理でしょと。確かに通勤時間は短くない。彼女は毎朝7時過ぎに前橋駅を発ち、両毛線と新幹線を乗り継いで、東京駅まで向かわなくてはならない。

ただ、幸い前橋の住居も東京の職場も駅近なので、通勤時間はドアツードアでぴったり1時間半。これくらいの通勤時間は、東京では決して珍しくない。

民間調査会社「マクロミル」が最近実施した調査によると、1都3県（神奈川、千葉、埼玉）に住み、都内に電車で通う通勤・通学者の13.7%が片道1時間半以上の通勤・通学時間だそうだ。片道1時間以上となると55.0%と半数を超える。そして、同調査によると、85.5%の人が通勤・通学時に「満員電車」の中で窮屈な時間を過ごさざるを得ないという。

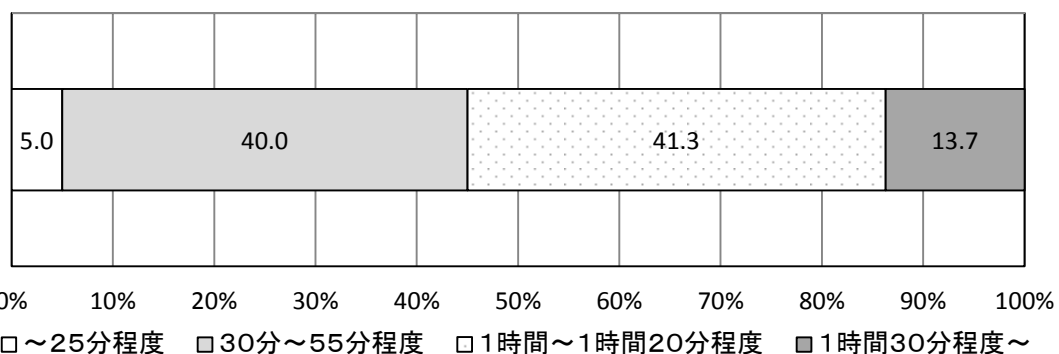
混雑度合いを尋ねると、「全く身動きが取れない」が13.8%、「手・足は動かせるが、身体の位置は動かせない」が29.5%。東京への一極集中の結果であるが、大変なことだ。

妻に東京までの通勤はどのようなものかを聞いてみると、電車はそれなりに混んでいるが、座れないことはなく、きわめて快適とのこと。新幹線の静かな車内では睡眠不足を解消すべく寝る人だけでなく、新聞や本を読む人、パソコンを使って仕事や勉強をする人、スマートフォンで音楽や映画を楽しむ人など様々。通勤・通学時間をそれぞれの方法で有効に活用している点が印象的だそう。

妻の職場復帰からちょうど2週間が経過したが、これまでのところはおおむね順調。不確実性の高い毎日であるが、次男が生まれた直後のバタバタの日々が戻ってきたようで、なぜかワクワクも感じていたりしている。

妻には、高崎は当然のこと、前橋からも東京に通えることを示してもらいたい。そんなことを考えながら、今日も私は、妻が家を出るタイミングで子どもたちを起こし、彼らの食事、着替えを済ませてから、保育園に送ってきた。時間通りに出勤できたことにホッとしているところである。

片道の通勤通学時間



2016年10月。マクロミル「『満員電車はもう嫌だ！』電車での通勤・通学事情(東京・大阪編)」から

日本銀行前橋支店長
神山 一成